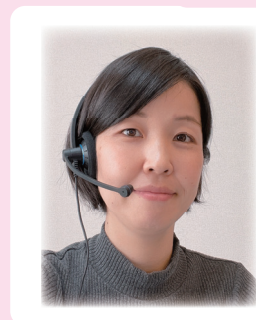


Medi-Way 医療通訳者紹介 Vol.19 ポルトガル語担当 大窪さん

◆なぜ医療通訳者になった？

私は父の仕事で、幼少期にブラジルへ移住しました。20年後に帰国しパティシエとして洋菓子製造の仕事をしていたのですが、長女出産時の産休・育休期間に地域の「医療通訳者育成研修」の講座に応募したのがきっかけとなり、医療通訳業務に携わることになりました。元々ブラジルでは管理栄養士の資格を取得していたので、医療には興味もあり、大学で学んだ医療用語や得意なポルトガル語を活かせる医療通訳者の仕事にとっても魅力を感じています。



◆今まで医療通訳に携わってきて一番嬉しかったことは？

この仕事に携わって毎日実感しているのは、医療関係者や患者さんの感謝の声が直に届き、人の役に立っているという事です。以前、整形外科の診察で通訳依頼があり、それは1週間前に救急外来に来られた多発関節痛の患者さんの再診日でした。前は通訳がいなかったために、医師が診断や治療の説明に苦戦したとのことでしたが、医師が伝えたい事、患者さんが聞きたい事を通訳させていただき、今回は診察がスムーズに進みました。途中、医師が書類を取りに隣の診察室へ行った際に、「通訳さん通すとマジやばい！」と嬉しそうな声を上げておられるのが聞こえた時は、とても嬉しかったです。

◆より良い通訳をするために心掛けていることは？

経験を重ねるごとに自信は付いていきますが、より良い医療通訳者になるためには学び続ける姿勢がとても大切だと思っています。医療は人の命や健康に関わることです。医療関係者と患者さんとの架け橋になっているという責任をしっかりと持ち、つねに勉強をし、準備することを心がけています。また、医療通訳者研修の場に積極的に参加し、沢山の方と意見交換しつつ、自身の成長に繋げていきたいと思います。私が尊敬する医療通訳者の先輩がいつも言っていること、それは、「挨拶の大切さ」です。通訳の際には医師や患者さんに対して挨拶と笑顔を大切にすることで、時間のかかりがちな通訳介入がとてもスムーズに行くと実感しています。これからも、誰かの役に立てる医療通訳者でいられるよう努めていきたいです。



「医療通訳者が語るピンチの場面！」

私たち医療通訳者は、時に難しい専門用語が飛び交う医療の現場で、あたかも「落ち着いた」様子で通訳に専心していますが、やはり心の中では「キャーッ、ピンチ！」と叫んでいることが往々にしてあります。

まず多くの通訳者が語ったのが「いきなり聞いたことない病名が！」や「先生のおっしゃる意味が分からない…」です。特に遠隔通訳では、接続があってまさに「いきなり」通訳場面となりますので、「えーっと…」と考えている時間はありません。ではどうするのか？電子辞書や自作の単語帳を常に準備している人もたくさんいますが、やはり基本は「きちんと質問して確認する」ことです。勇気を出して先生に「調べさせてください」とお願いしたら、とても丁寧に解説してくださり感動したということもありました。

難しい通訳という意味では、精神科の通訳を挙げた通訳者も複数いました。そもそもの発言の筋が全く通っていない、持病が進行して精神不安定な状態にある患者さん等々、いずれも通訳者は忠実に訳すわけですが、「理解できなかったこと」を伝えた後の方が、先生も患者も納得してくれた」とホッとした経験談も。

その他多かったのは、患者さんの方言が全く聞き取れず苦労したというお話。これは各言語いろいろあって面白そうなので、またあらためて特集しますね。時には終末期の通訳で涙をこらえ、また時には「納得いかない！」と激昂する患者さんにたじろぎながら、通訳者たちは今日も奮闘しています(^_^)；

通訳者に聞いてみたいこと、 伝えたいことはありませんか？



いつもお読みいただき、ありがとうございます。
只今、ご意見募集中です。
皆さまから通訳者へ「こんなことを聞いてみたかった」といったご質問や、「通訳してもらったときに…」等のご感想、また「こういうテーマを」というご要望などなど、いろいろとご意見をいただけるとうれしく思います。下記メールアドレス、またはQRコードを読み取っていただくと簡単に送信ができます。ぜひ皆さまの“生の声”をお聞かせください。
これからも”Medi-Way 医療通訳だより”をどうぞよろしくお願いたします。



スタッフ一同

ご連絡先はこちら
tic@towaeng.co.jp

